

「土曜日を活用した教育の在り方」検討会議

分科会「まとめ」

「土曜日における地域での体験活動等の在り方」分科会

- ・地域での体験活動等の充実に向けた工夫・改善..... 1 - 1
- ・土曜授業等が実施された場合の地域での体験活動等への影響・工夫..... 1 - 2

「土曜日における学校教育の在り方」分科会

- ・検討の理念と方向性..... 2 - 1
- ・土曜日を活用した学校教育モデル例..... 2 - 2
各モデルの下欄「教員の勤務負担軽減のための工夫・留意点等」は、「教員の勤務環境の改善に向けた法制度等の検討」分科会で検討されたもの。
- ・「土曜日を活用した教育の在り方実践研究事業(仮称)」実施要項(案)..... 2 - 3

「教員の勤務環境の改善に向けた法制度等の検討」分科会

- ・教員の土曜勤務に係る課題と対応方策及び土曜日教育実施に..... 3 - 1
当たっての私学と公立における法制度上の相違点
- ・平日の過密感の軽減を考慮した週時程・勤務の例..... 3 - 2

土曜日における地域での体験活動の在り方

地域での体験活動等の充実に向けた工夫・改善

学校週5日制導入後、各地域での体験活動等の取組が定着・充実してきている状況にある一方で、先のアンケート調査結果で明らかになった課題を踏まえ、今後、地域での体験活動等への参加を促進し、子どもたちの「生きる力」(社会性)をはぐくむ方策として、モデル的に示したものである。

地域での体験活動の現状と課題等

現状・課題	課題への対応の視点
小学生・中学生・高校生の各段階で参加ニーズはあるが、地域での体験活動への参加率が低い 多くの中学生・高校生は部活動に参加	子どもの発達段階・生活実態に応じた参加形態・内容の工夫
地域での体験活動等へ参加したい家庭(保護者・子ども)への情報伝達が不十分	各種の取組の情報が各家庭に届くような周知方法の工夫 各団体の活動情報を一括して興味に応じて選択し、参加できるような周知方法等の工夫・改善

対応

対応方向 子どもの発達段階・生活実態に応じた参加形態・内容等の工夫

子どもたちが「生きる力」(社会性)を身に付けるという観点から

発達段階	参加モデル	工夫の視点
小学生 ↓	受動的参加 ↓	・とにかく体験活動に参加させる (参加形態：家族、クラスの友達) 内 容：興味関心のあるもの
中学生 ↓	主体的参加 ↓	・体験活動の運営等にも参画させる (参加形態：生徒会・部活動単位) 内 容：活動の企画運営等
高校生	主体的参画	

対応方向 保護者や子どもとのつながりに着目した周知方法等の工夫

周知方法の改善策

アプローチ	既存の組織	連絡体制
地域社会のつながり	自治会、サークル等 マスメディア	回覧板、集会、ホームページ 地域FM・新聞等
学校のつながり	学級、学年、部活動、 生徒会、PTA	学級・学年だより、PTA 会報・Eメール、集会

活動日等をも
保護者等に
周知

担任や部活動顧問の参加呼びかけなどが、子どもの参加促進につながりやすく、学校との連携強化が効果的。

対応方向 興味に応じて選択し、参加できる情報提供方法の工夫

各種団体が実施しているスポーツや体験活動の情報をコーディネートする仕組みづくり

既存の組織等を活用した体制づくり

地域の実態に応じて、自治会や「京のまなび教室」、「学校支援地域本部」や「総合型地域スポーツクラブ」等がそれぞれに提供している情報を一つにまとめ、家庭や子どもに周知できる体制づくりの推進

新たな人材の育成

地域や学校から家庭や子どもに周知できる体制づくりのため、各種団体の活動情報を調整し情報提供する人材の育成推進

地域における体験活動等の充実に向けて

～ 発達段階に応じ、12年間を見通した子どもの育成～

視点

内容・参加形態等の工夫

小学生

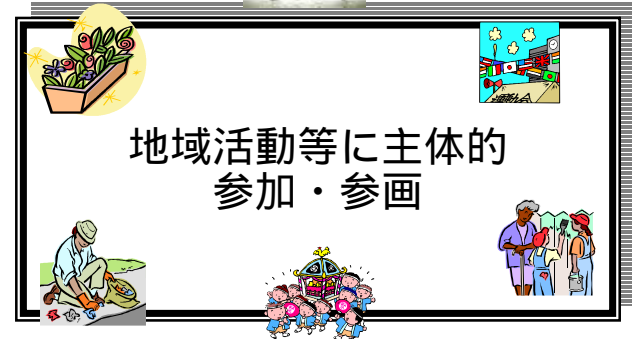
体験活動の楽しさ

地域貢献意識・主体性の育成

多くの体験活動に参加
～ 多様な体験活動の提供
～



地域活動等に主体的
参加・参画



【内容等の工夫】
子どもの好奇心を喚起する内容を工夫(ポイントは、対象が小学生なので、楽しいことが重要)
子どもが内容を選択して参加できる実施方法の工夫

【実施時期・場所・参加形態の工夫】
授業実施後に、学年単位、クラス単位で多様な体験活動を実施
親子で参加できるような工夫も必要
広報・周知は、地域の回覧板や学校を活用
場所は 学校 公民館 資料館等の文化施設 社会教育・体育施設

【内容等の工夫】
中学生段階では、楽しさだけでなく、子どもの主体性、地域貢献意識をはぐくめるような、内容を工夫
地域の行事(町民運動会、地域イベント等)に参加
花づくりに取り組み近隣の公共施設や福祉施設等に配布 地域貢献
高校生段階では、経験を活かし、体験活動等に積極的に運営スタッフとして参画させる等の工夫

【実施時期・場所・参加形態の工夫】
部活動単位又は生徒会で参加できるような、参加形態の工夫
広報・周知は、地域の回覧板や部活動、生徒会など活動を活用

規範意識の育成、コミュニケーション能力など、社会性の育成

土曜授業等が実施された場合の地域での体験活動等への影響・工夫

地域での体験活動等の観点から、土曜日授業を円滑に実施するための留意すべき事項を整理するとともに、土曜授業等の実施日における体験活動の充実方策や発達段階に応じた事業をモデル的に示したものである。

土曜授業等が地域での体験活動に及ぼす影響等

影 響	実施に当たっての留意点
土曜日に実施されている地域での体験活動等と日程が重複 毎週実施されているスポーツ少年団等の活動や市町村単位、地区単位、府レベルで実施されている公式試合等と日程が重複	関係団体への十分な周知、調整が必要 現状を踏まえ、一定のレベルで土曜授業等の実施日を統一することが必要 （特に、スポーツ活動との関係）

土曜授業等における地域での体験活動等の充実方策

土曜授業等の実施日を「体験デー」（クラス・学年毎に）と位置づけ、授業等終了後、様々な体験活動等を同時に開催

実 施 モ デ ル	期待される効果	課 題
<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; align-items: center; margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-right: 10px;">土曜日授業等</div> <div style="font-size: 2em; margin: 0 10px;">➔</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> （内容例） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;">自然体験活動コース</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;">スポーツ活動コース</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;">科学体験等学習コース</div> </div> </div> <div style="display: flex; align-items: center; margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-right: 10px;"> （子どもの興味に応じてコースを選択） </div> <div style="font-size: 2em; margin: 0 10px;">➔</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> （実施主体） 「京のまなび教室」 「総合型地域スポーツクラブ」 小学校 P T A 高 校 地域の団体 等 </div> </div> <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="margin-right: 10px;"> （中学・高校生） </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-right: 10px;">部活動</div> <div style="font-size: 2em; margin: 0 10px;">➔</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">地域活動へ参画</div> </div> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・モチベーションが低い子どもも参加しやすい。 ・多様な活動を体験できる ・クラス単位で参加できる ・興味に応じて参加できる <div style="text-align: center; margin: 10px 0;"> ↓ 体験活動への参加者が増加 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・地域と学校との連携促進 	<ul style="list-style-type: none"> ・すべての子どもを受け入れられるとは限らない。 ・学校、地域社会の協力が必要。

小学校のクラス単位、学年単位で担任が呼びかけ、参加を促す、一緒に参加するなどの工夫も効果的。
 次の地域での体験活動の広報の場としても活用することも効果的。

体験活動等の事業例：別添のとおり

< 地域での体験活動等の取組例 >

[自然体験活動]

事業名	川の生き物採集探検事業	対象	小学生・中学生 高校生
事業の内容	<p>地域の川に生息する生き物を採集し、どのくらいの種類の生き物が生息しているかの調査を通して、環境問題を学習する体験活動を実施</p> <p>まなび教室の運営スタッフに加え、地元の生物部(クラブ)の高校生にもボランティアスタッフとして参加を依頼し、子どもたちの支援にあたる。</p> <p>地元の高齢者にも積極的な参加を呼びかけ、子どもたちの活動を支援する中で、昔の川遊体験談や川の水質の変化等について高齢者から子どもたちに教えてもらう機会とする。</p> <p>生き物を採集後、生物部の高校生と採集した生き物の名前等について調べ、発表の機会を設定する。</p>		
参加形態	小学生、保護者、地域住民、高校生ボランティア		
実施主体	市町村、公民館、地域の協力者、自治会等		
事業の実施による効果	<p>地域住民と子どもとの交流促進、地域の活性化につながる。</p> <p>小学生：生き物採集を通して自然への関心が高まる。</p> <p>高校生や年長者へのあこがれ、将来の目標につながる</p> <p>高校生：小学生に教えることを通じて自己有用感につながる</p>		
実施上の課題	都市部では実施場所の選定が困難 生物部高校生ボランティアの確保(高校と連携)		

[スポーツ活動]

事業名	地域の様々な団体と連携した スポーツ体験活動	対象	小学生 中学生・高校生
事業の内容	<p>総合型地域スポーツクラブ、老人会等が連携し、子どもたちが様々なスポーツ体験活動を実施</p> <p>体験活動例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「キンボール」「ペタンク」等を中心としたニュースポーツ ・グラウンドゴルフ ・サークル、総合型地域スポーツクラブと連携したスポーツ活動 <p>体験する種目によっては、子どもたちと団体とが対戦し、子どもたちとの交流を深める。</p>		
参加形態	地域住民、小学生		
実施主体	自治会、総合型地域スポーツクラブ、公民館サークル		
事業の実施による効果	<p>地域住民と子どもたちとの交流促進</p> <p>地域の他団体と連携することにより地域ネットワークの強化</p>		
実施上の課題	他団体との日程調整(学校活動と位置づけるなどの工夫が必要)		

[科学等体験学習]

事業名	企業等連携した体験活動	対象	小学生 中学生・高校生
事業の内容	<p>まなび教室運営委員会が企業関係者、大学教授、専門技術者等を特別講師として迎え、子どもたちの体験活動を実施。</p> <p>企業等の特色を生かした、体験活動を実施 体験内容例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キャリア講座（スカイキャストによる機内サービス体験） ・紙ヒコーキ教室（JAL） ・爬虫類（ヤモリ、トカゲ、ヘビ等）の話（大学教授） ・食育バターづくり（食品企業との連携） <p>運営スタッフは、地域のボランティア、まなび教室関係者</p>		
参加形態	地域住民、小学生		
実施主体	市町村、まなび教室運営委員会、地域ボランティア		
事業の実施による効果	さまざま分野の仕事の一部を体験することで、キャリア教育にもつながる。		
実施上の課題	小学校低学年向けの体験活動が少ない		

[科学等体験学習]

事業名	P T A による「親のための応援塾」開催事業と連携した体験活動	対象	小学生・中学生 高校生
事業の内容	<p>まなび教室と就学前の子どもを持つ保護者を対象とした「親のための応援塾」開催事業と連携して子どもたちの体験活動を実施。</p> <p>「親のための応援塾」開催日の前半を、まなび教室参加の子ども、新入生親子と一緒に楽しんで参加できる体験活動を実施。 （例：リズム体操、音楽遊び、フラフープ等） 後半は、親を対象にした「親のための応援塾」で、P T A の先輩保護者と新入生の保護者が子育て等について交流。 交流の時間を活用し、まなび教室の関係者から新入生保護者に「まなび教室」についての説明を実施</p>		
参加形態	小学校就学前園児・保護者、小学生		
実施主体	学校支援地域本部、小学校 P T A、公民館サークル等		
事業の実施による効果	<p>小学生：入学前に小学校児童と共に活動することで、年長者としての自覚につながる。</p> <p>家庭：保護者同士のつながりができるなど、家庭教育支援にもつながる。</p>		
実施上の課題	参加者（就学前の子どもがいる保護者）を確保する工夫が必要		

[科学等体験学習][スポーツ体験]

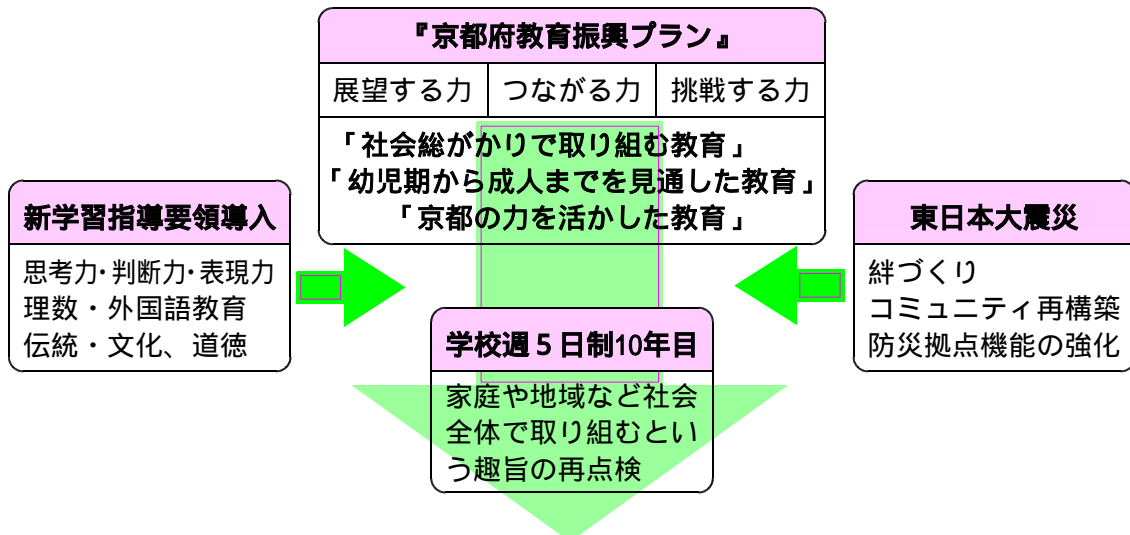
事業名	高校生による体験活動支援事業	対象	小学生 中学生・高校生
事業の内容	<p>土曜日を活用して、府立高校を地域における子どもの体験活動の場として活用する。</p> <p>学期に1回以上、土曜日における体験活動を実施</p> <p>指導は、高校教員等、高校生がボランティアとして支援に取り組む</p> <p>体験活動の分野は、科学実験教室、工作教室、スポーツ教室、文化教室、本の読み聞かせ等</p> <p>高校生によるボランティアを原則とするが、内容により可能であれば中学生もボランティア補助として参加</p>		
参加形態	高校教員、高校生ボランティア、小学生		
実施主体	高等学校		
事業の実施による効果	<p>高校生：小学生との関わりの中で自らへの誇りと社会を担う責任の自覚につながる</p> <p>小学生：高校生の姿をみることで、大人へのあこがれ、将来の目標につながる</p> <p>府立高校：自校の教育内容への理解の促進につながる</p>		
実施上の課題	活動の周知方法に工夫が必要		

[地域貢献活動]

事業名	Let's チャレンジ地域貢献	対象	小学生 中学生・高校生
事業の内容	<p>地域の行事（町民運動会、クリーン活動、地域の祭り等）に部活動の一環として参加し、地域貢献意識を育む場とする。</p> <p>部活顧問の指導で、地域のどのような行事に参加するかを、年度当初の部活動年間計画に組み入れる。（各部活年1回程度）</p> <p>参加に当たっては、行事を主催する自治会等と部活顧問が十分な事前協議を行っておく。（当日は顧問等の引率が原則）</p> <p>行事により異なるが、基本的には運営スタッフの役割を担ったり、吹奏楽部の演奏、合唱等の発表を行う等の活動を実施。</p>		
参加形態	地域住民、中学・高校生		
実施主体	地域の団体（地自治会、青少年育成団体、社会福祉施設等）		
事業の実施による効果	<p>中高生の自尊感情の醸成につながる。</p> <p>多世代交流が促進され、地域の活性化につながる。</p> <p>地域住民の中高生に対する理解が促進される。</p> <p>学校と地域社会の相互連携の強化にもつながる。</p>		
実施上の課題	<p>部活の公式戦との調整</p> <p>部活顧問の意識変革</p>		

検討の理念と方向性

なぜ土曜日の活用なのか？



プランに示された教育を積極的に進めるために
平日以外の取組 (= 土曜日の有効活用) を模索

なぜ土曜日の活用なのか？

平常の教育課程に縛られない柔軟な教育活動が可能
子どもと保護者がともに学べる機会が増える
平日ではつながれない人とつながることができる

土曜日の過ごし方の評価と今後の在り方

< 評価 >

子どもは家庭での生活時間は多いが、地域での生活時間が少なく、土曜日をより有効に過ごすための取組の余地がある。
保護者は子どもの土曜日の過ごし方に概ね満足しており、その上で学校や地域による教育活動にも期待している。
教職員については平日の過密感や土曜勤務による負担感を解消・軽減する必要がある。

< 今後の目標 >

『京都府教育振興プラン』の基本理念を実現するため、学校週5日制の趣旨の下で京都府が進めてきたこれまでの取組状況や成果を踏まえ、土曜日を活用したより多様で魅力的な教育を展開する。

< 具体的方策 >

家庭の教育力のさらなる向上
柔軟で弾力的な教育活動の展開
学校と地域が連携した取組の強化
教職員の負担軽減とリンクしたしくみづくり

土曜日を活用した学校教育モデル例

1 モデル例について

土曜日を活用した学校教育を進めるにあたり、どのような活用が考えられるかを簡単にモデル例として紹介するものである。

<モデル例留意事項>

あくまでも取組例を紹介するものであり、この内容にしばられるものではなく、全く新たな観点の取組を行うこともありえる。

これまで平日に取り組んでいた取組を土曜日にも実施することもありえる。

モデル例全てを実施するものではなく、モデル例の1つを実施することもありえるし、複数のモデル例を組み合わせたこともありえる。

授業(特別活動除く) = A、特別活動 = B、課外活動 = Cの区分で記載しているが、同様の内容であっても、進め方や対象児童生徒等を変えることで、その区分も変動する。

モデル例に記載している「対象学年」や「年間回数」等も参考としてのものであり、学校や地域の実状に応じて柔軟に対応する。

学校が地域と連携して土曜日を活用した取組を行うことの意味を考え、取組を行う一つのきっかけとして作成したもの

2 モデル例マトリックス

活動区分 対象者区分	授業(特別活動除く) A	特別活動 B	課外活動 C
教員 → 児童生徒	学びトライアル (小テスト+補習) 学年横断型学習発表会 もうひとつの小さな研修旅行	校外学習(遠足) 団体演劇鑑賞 月1 職場体験学習	補習アラカルト
教員 → 児童生徒 保護者	公開授業 保護者参加型授業	親子映画鑑賞教室 スクール・ライブ ・ガイダンス	部活動見学
教員 → 児童生徒 保護者 地域	地域人材による 総合学習 シティズンシップ 教育	子ども見守り ウィーク チャレンジ! 体力測定	土曜振り返り学習
教員 → 保護者 児童生徒 → 地域	学習成果発表会	学校招待会	文化・スポーツ交流
教員 → 児童生徒 保護者 → 地域	秋のフェスティバル	防災マップづくり	中学校「絆」祭り

ゴシックの取組はモデル例あり...別紙参照

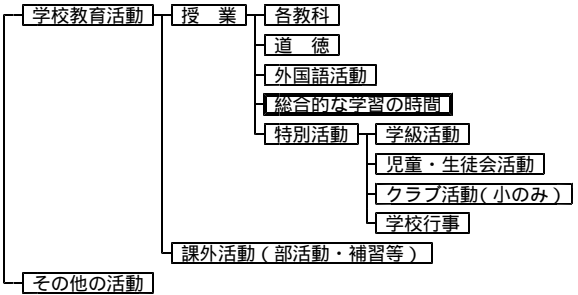
～ は、それぞれの具体的方策に対応

: 家庭の教育力のさらなる向上

: 学校と地域が連携した取組の強化

: 柔軟で弾力的な教育活動の展開

A - 1 学校と地域が連携した取組の強化
柔軟で弾力的な教育活動の展開

名 称	もうひとつの小さな研修旅行	
教育課程内外の位置付け		<p>児童・生徒の参加イメージ</p> <p>該当学年児童・生徒全員参加</p> <p>対象学年 小(5年) 中・高(2年)</p> <p>年間回数 1回</p>
	<p>職場体験が可能な事業所を複数開拓し、それぞれの体験先を児童・生徒が興味関心に応じて選択。仕事人へのインタビューや職場体験を通じて見たり感じたりしたことをまとめ、プレゼンテーションによる報告会を行う。</p> <p>事前学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体験先(8~12箇所)に応じて児童・生徒をグルーピング ・職業調べ、インタビューシートの作成 <p>職場体験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仕事体験 ・仕事人インタビュー <p>事後学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・礼状書き ・発表資料作成 <p>体験報告会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに下級生にプレゼンテーション ・下級生が観点別に評価を行い、感想を述べる 	
	<p>参加形態</p> <p>教員(・児童・生徒) 児童・生徒</p>	
その他	<p>発表を聞く側の児童・生徒も土曜活用の一環として参加 保護者、体験先事業所の方を招いての発表も可能 地元商店街や農家によるサポートも期待できる</p>	

期待される効果	実施上の課題
<p>普段の授業とは異なり、興味・関心や進路・適性を同じくする児童・生徒による意欲的な取組となる。</p> <p>学校外の大人とコミュニケーションをとることにより、「つながる力」を育成することができる。</p> <p>仕事の大変さや喜びを、インタビューや体験発表会を通して知ることができる。</p>	<p>体験先の開拓や事前調整</p> <p>安全面での配慮</p> <p>バス等の手配</p> <p>報告会の質の向上</p>

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点
<p>平日実施していた取組を土曜日に実施することで、月～金曜日の過密感の軽減が図られる。</p>

名 称	公開授業									
教育課程内外の位置付け		<table border="1"> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">児童・生徒の参加イメージ</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">全校児童・生徒参加</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">対象学年</td> <td>小、中、高 全学年</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">年間回数</td> <td>3回(学期に1回)～ 6回(2ヶ月に1回)</td> </tr> </table>	児童・生徒の参加イメージ		全校児童・生徒参加		対象学年	小、中、高 全学年	年間回数	3回(学期に1回)～ 6回(2ヶ月に1回)
児童・生徒の参加イメージ										
全校児童・生徒参加										
対象学年	小、中、高 全学年									
年間回数	3回(学期に1回)～ 6回(2ヶ月に1回)									
内 容	<ol style="list-style-type: none"> 1 保護者向け授業参観 各学校で平日に実施している授業参観を土曜日に実施 2 児童・生徒向け授業見学 中学校：通常の授業を土曜日に実施し、地元の小学校高学年が見学 高 校：通常の授業を土曜日に実施し、中学生が見学 3 一般向け公開授業 PTA、学校評議員、他校種教職員、地域の関係者等を対象に授業を公開 									
参加形態	<ol style="list-style-type: none"> 1 教員 児童・生徒、保護者(参観のみ) 2 教員 生徒・他校種児童・生徒 3 教員 生徒・保護者・地域 									
そ の 他										

期待される効果	実施上の課題
<p>さまざまな大人の考えや価値観に触れることにより、子どもの学びが深まる。 保護者が子どもの学びの過程を間近で見ることができる。 授業での気づきを家庭で共有することができ、家庭教育向上の契機となる。 授業改善に外部評価を活用できる。 「中1ギャップ」の解消につながる。 開かれた学校づくり、学校と地域の信頼関係構築につながる。 中学生の進路選択の一助となる。</p>	<p>すべての保護者が来校できるとは限らない。 保護者等の参加率向上</p>

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点
<p>平日の授業を土曜日に実施することで、月～金曜日の過密感の軽減が図られる。 小学生を引率する教員は、その小学生の在籍校が授業見学を学校行事として位置づけることで、週休日の振替等が可能となる。</p>

A - 2

家庭の教育力のさらなる向上
柔軟で弾力的な教育活動の展開

名 称	保護者参加型授業			
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ 全校児童参加		
		対象学年	小 全学年	
		年間回数	3回（学期に1回）～	
内 容	<p>平常の授業や環境学習、防災教室などのテーマ学習に保護者が子どもとともに参加して授業を実施</p> <p>例：身近な環境問題についてのグループ・ディスカッション 紙漉体験＆書道教室 調理実習 日本の歴史すごろく 脳トレカルタ、漢字クイズ、… 学年PTA行事として実施</p>			
参加形態	教員・保護者 児童・生徒・保護者			
そ の 他				

期待される効果	実施上の課題
<p>さまざまな大人の考えや価値観に触れることにより、子どもの学びが深まる。保護者が子どもの学びの過程を間近で見ることができる。</p> <p>授業での気づきを家庭で共有することができ、家庭の教育力向上の契機となる。</p> <p>開かれた学校づくり、学校と地域の信頼関係構築につながる</p>	<p>参加する保護者の人数把握や打ち合わせが必要。</p> <p>すべての保護者が来校できるとは限らない。</p>

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点
<p>平日の授業を土曜日に実施することで、月～金曜日の過密感の軽減が図られる。</p> <p>教材等の準備が負担とならないように、平常授業の延長として実施する。</p> <p>保護者との打合せは最小限に止め、実施前の授業参観日を活用するなどの工夫を行う。</p> <p>保護者の積極的な協力支援を求めることが必要。</p>

A - 4

家庭の教育力のさらなる向上
 学校と地域が連携した取組の強化
 柔軟で弾力的な教育活動の展開

名 称	学習成果発表会	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ ----- 全校児童・生徒参加 対象学年 小、中、高 全学年 年間回数 3回程度 (学期に1回)
内 容	保護者や地域の方々に来校してもらい、児童・生徒の学習発表を見学してもらう。 例 国語：作文、詩、俳句、短歌等の作品の発表 社会：調べ学習の発表 理科：自由研究の発表 英語：暗唱文の発表、スキットの発表 総合：体験学習のまとめの発表 など	
参加形態	教員・児童・生徒 保護者・地域	
そ の 他	内容によって授業時間を弾力化(20～100分等) 学級単位、学年単位等、さまざまな形態での発表 通常の授業で実施しているものを発表 1教科だけでなく、複数教科、全教科での発表 高校においては、政策提案等のプレゼンテーション等も	

期待される効果	実施上の課題
定期的な授業公開によって授業改善に寄与 保護者や地域の方々に見てもらい、発表に 対する評価や感想を得ることにより、児童 ・生徒の学習へのモチベーションが高ま る。 単なる授業参観ではなく、子どもたちの活 躍の場を見ることができると、保護者、 地域の方の参加、絆づくりが期待できる。	公開のためだけの単発の取組になると学力 向上につなげにくい。 発表を中心に年間指導計画を立てると、普 段の授業を圧迫してしまう。

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点
平日実施していた取組(授業参観・学習発表会等)を土曜日に実施することで、月～金曜日の過密感の軽減が図られる。

<p>名 称</p>	<p>秋のフェスティバル</p>	
<p>教育課程内外の位置付け</p>		<p>児童・生徒の参加イメージ</p> <p>該当学年児童全員参加</p> <p>対象学年 (幼) 小 1・2年生</p> <p>年間回数 1回</p>
<p>内 容</p>	<p>教科「生活科」で幼稚園児や保育園児を招待し、保護者、地域の方、園児とともに楽しむ合同授業を実施。事前のオリエンテーションや探検も行う。 幼稚園・保育園児には「もうすぐ1年生」体験入学推進事業としても位置付ける。</p> <p>オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交流ゲーム等により園児と児童のグルーピング ・合同で秋のフェスティバルを計画 <p>「秋の公園探検隊」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公園を探検して秋（どんぐり、落ち葉など）を探すネイチャーゲームをする。 ・見つけたものを持ち寄り、遊びコーナーでの遊具等を作成 ・地域の人に「秋のフェスティバル」の招待状をかく。 <p>「秋のフェスティバル」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の人を含め、コーナー遊びを楽しむ。 ・「親のための応援塾」として、秋の食材を利用したおやつ作りも実施 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>「もうすぐ1年生」体験入学推進事業とは... 保育所、幼稚園から小学校への円滑な接続を図るため、小学校において次年度の新1年生を対象とした1週間程度の体験入学等を実施。</p> <p>親のための応援塾とは... 小学校就学前の子どもを持つ保護者などが語り合い、交流し、学び合うことで子育ての不安や悩みをやわらげ、親同士のネットワークづくりを進める取組。</p> </div>	
<p>参加形態</p>	<p>教員・児童・保護者・園児・地域</p>	
<p>その他</p>	<p>平日にも「秋のフェスティバル」に関する授業を実施</p>	

期待される効果	実施上の課題
<p>連続的な取組の設定は、幼稚園教員、保育士と学校教員の指導に対しての共通理解が深まり、幼児と児童の交流も深まる。幼小の円滑な接続のカリキュラムを考えた体験プログラムや教員の研修が進む。園児が、ねらいをもって参加できる。学園児の引率に際し、保護者や地域の協力が得やすい。複数の園、保育所から一斉に参加できる。</p>	<p>任命権者の異なる幼稚園教員や保育士の勤務の整理 オリエンテーションから本番までの実施スパンが長くなる場合、幼児、児童の学習意欲の持続が困難</p>

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点
<p>「もうすぐ1年生体験入学推進事業」等の事業を実施している学校はそのノウハウを活かす。 保護者・地域・幼稚園（保育園）との事前打合せは必要最小限に止め、土曜活用の時間を実施するなどの工夫を行う。 保護者・地域の積極的な協力支援を求めることが必要。</p>

B - 2

家庭の教育力のさらなる向上
柔軟で弾力的な教育活動の展開

名 称	スクール・ライフ・ガイダンス	
教育課程内外の位置付け		<p>児童・生徒の参加イメージ</p> <p>該当学年児童・生徒全員参加</p> <p>対象学年 小(1・3・5年生) 中(1年生)</p> <p>年間回数 1回(4月)</p>
内 容	<p>学校と保護者の共通理解のもと、児童・生徒がより充実した学校生活を過ごせるよう、学齢に応じた学習や生活に関するオリエンテーションや交流行事などを児童・生徒と保護者を対象に実施する。</p> <p>学習オリエンテーション ・ノートの使い方 ・辞書の使い方 ・予習・復習の仕方 ・「予習 模擬授業 復習」のシミュレーション指導</p> <p>生活オリエンテーション ・校則について ・部活動・ボランティア活動について ・食と健康づくり教室 ・交通安全教室 ・安心ネット教室 ・非行防止教室 ・認め合いワークショップ</p> <p>校歌練習 保護者講話「私たちの学校生活～一枚の写真から～」 生徒・児童会長講話「涙の卒業式を迎えるために」 ・本校の学校行事や特色ある取組</p> <p>交流行事 ・バーベキュー、飯ごう炊さん、球技大会</p>	
参加形態	教員 児童・生徒・保護者	
そ の 他	学校外での施設を利用するなどの工夫	

期待される効果	実施上の課題
<p>児童・生徒の発達段階に応じた新たな生活ステージに向けた教育方針等について学校・家庭の共通理解を図ることができる。 教員と保護者の信頼関係を早い時期に築くことができる。 家庭学習の方法や通学、食事のあり方等、家庭の教育力向上つなげる取組が可能。 交流行事等により、保護者がその後のPTA行事等に参加しやすい環境をつくることことができる。</p>	<p>参加が不可能な保護者へのサポートが必要 児童・生徒と保護者を収容できる施設が必要 交流行事等、メニュー的には半日でこなすことができない。</p>

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点
<p>平日実施していた取組を土曜日に実施することで、月～金曜日の過密感の軽減が図られる。</p>

B - 3

家庭の教育力のさらなる向上
学校と地域が連携した取組の強化

名 称	子ども見守りウイーク(通学路安全確認DAY)	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ ----- 全校児童参加
	対象学年 小 全学年	
	年間回数 1回 (5月中旬から下旬)	
内 容	<p>子どもたちを見守り、登下校時のあいさつを励行する強化週間を設定し、週間中の最初の土曜日に次の取組を実施する。</p> <p>登 校：保護者と児童と一緒に登校 1時間目：登校班ごとに通学路の安全マップを作成 2時間目：1～3年：授業参観(道徳・生活科等) 4～6年：非行防止教室 3時間目：児童会総会 ・児童、PTA、地域がそれぞれ取組をアピール 下 校：保護者と児童が安全マップを確認しながら下校する。</p>	
参加形態	教員、児童、保護者、地域	
そ の 他	登校後すぐの休み時間も作業時間に組入れるなど、授業時間を柔軟化 地域の民生児童委員、地区の役員等と連携	

期待される効果	実施上の課題
子どもとともに通学路を歩くことで、保護者が普段は気づかない危険箇所を確認できる。 地域の方の思いや考えが子どもや保護者に伝わる機会となる。 保護者と子どもが共通の話題で話し合うことができる。	大規模校では人数的に全校実施が困難(登下校) 登校距離の長短で保護者、児童の取組度合が変化する可能性 保護者が参加できない児童への対応

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点
安全マップの作成に向けての準備や地域への協力依頼・連携をPTA役員が中心になって行い、教員は当日の児童会総会の運営や登下校指導等のサポートにまわる。 PTA役員との事前打合せは必要最小限に止め、土曜活用の時間を実施するなどの工夫を行う。 保護者・地域の積極的な協力支援を求めることが必要。

B - 3

家庭の教育力のさらなる向上
学校と地域が連携した取組の強化

名 称	チャレンジ！体力測定	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ ----- 全校児童・生徒参加
		対象学年 小、中 全学年
		年間回数 1・2回 (春・秋)
内 容	全校児童・生徒の新体力テスト測定、保護者や家族の体力測定を合同で実施する。 教員：主に児童・生徒の体力測定を実施 地域の指導者：年齢に応じた体力測定を保護者やその家族に実施	
参加形態	教員・地域の指導者 児童・生徒・保護者・その家族	
そ の 他	現状として、体力測定は「学校行事」として位置づけている。	

期待される効果	実施上の課題
子どもと保護者、家庭が体力や健康について意識を共有することができる。 子どもの体力の状況を保護者が把握し、自らの体力実態を知る機会となる。	安全な測定場所の確保 けが等発生時の校内救急体制の整備

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点
参加者（保護者、家族等）にも協力を得ながら実施する。 保護者・地域の積極的な協力支援を求めることが必要。

B - 4

家庭の教育力のさらなる向上
学校と地域が連携した取組の強化

名 称	学校招待会	
教育課程内外の位置付け		<p>児童・生徒の参加イメージ</p> <p>全校児童・生徒参加(小は低学年除く)</p> <p>対象学年 小、中、高 小の高学年以上</p> <p>年間回数 1回</p>
内 容	<p>他校種の児童・生徒、保護者、地域の方等を学校に招待し、各学級・講座の学習や部活動の成果を発表。</p> <p>学校探検ラリー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校案内マップ、スタンプカードを来校者に配付し、ラリー形式で発表ブースを見学してもらう。 ・授業、部活動における成果物を教室内に掲示し、生徒が説明・発表。 <p>全体説明会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歓迎演奏、演舞 ・児童・生徒会作成プロモーションビデオの上映 ・児童・生徒による学校紹介 <p>イベント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・著名人による教育講演会 ・映画上映会 ・文化祭最優秀演劇発表 	
参加形態	児童・生徒(・教員) 他校種生徒・保護者・地域	
そ の 他	<p>児童・生徒の実行委員会で運営し、教員はサポート</p> <p>時期・校種によっては、教科として実施することも検討</p> <p>高校では学校説明会とセットで実施</p>	

期待される効果	実施上の課題
<p>開かれた学校づくりの推進</p> <p>児童・生徒の活動成果の発表の場を設けることにより、ゴールに向けた系統立てた指導が可能</p> <p>学校外の人に伝え、評価される体験を通して、自己肯定感をもち、モチベーションの向上につながる。</p> <p>様々な人と接することにより、コミュニケーション能力の育成を図ることができる。</p>	<p>大規模校での取組は工夫が必要</p> <p>すべての生徒を主体的に参加させる工夫が必要。</p>

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点
<p>文化祭(学習発表会等)・体育祭(運動会等)などの大きな学校行事とセットで実施する。</p> <p>小学生を引率する教員は、その小学生の在籍校が授業見学を学校行事として位置づけることで、週休日の振替等が可能となる。</p>

B - 5

家庭の教育力のさらなる向上
 学校と地域が連携した取組の強化
 柔軟で弾力的な教育活動の展開

<p>名 称</p>	<p>防災マップづくり</p>					
<p>教育課程内外の位置付け</p>		<p>児童・生徒の参加イメージ</p> <p>-----</p> <p>全校児童参加</p> <table border="1" data-bbox="991 434 1390 651"> <tr> <td>対象学年</td> <td>小 全学年</td> </tr> <tr> <td>年間回数</td> <td>1回</td> </tr> </table>	対象学年	小 全学年	年間回数	1回
対象学年	小 全学年					
年間回数	1回					
<p>内 容</p>	<p>自分たちの住むまちを探検し、身近にある危険な場所や防災施設・設備などを実際に見て回り、その結果を子どもの視点・意見・感性によって模造紙上の地図にまとめ、グループごとに発見したことや気付いたことなどを発表する。</p> <p>通学路を中心に5～6名のグループで探検 避難場所や危険箇所のチェック・写真撮影 気づいたこと等を地図に落とし込み、防災マップを作成 発表</p> <p>保護者・地域の方は各グループの引率、各地点での指導、マップ作成補助等にあたる</p>					
<p>参加形態</p>	<p>教員・地域・保護者 児童・保護者</p>					
<p>そ の 他</p>	<p>地域の地理・歴史等について事前学習 3年生以上は「総合的な学習の時間」として実施</p>					

期待される効果	実施上の課題
<p>社会全体の防災意識の向上を図ることができる。 土曜日に実施することにより多数の協力を得られ、学校と地域がつながる一助となる。</p>	<p>毎年同じ内容の場合、マンネリ化が懸念される。 防災の指導に関して、保護者・地域との共通理解の徹底が必要である。 1・2年生の活動を教育課程上のどこに位置付けられるか。 探検時の全校児童の把握が困難である。</p>

<p align="center">教員の勤務負担軽減の工夫と留意点</p>
<p>土曜日公開授業を活用して、子どもたちの事前学習に保護者、地域の方にも参加してもらおう。 保護者・地域の積極的な協力支援を求めることが必要。</p>

<p>名 称</p>	<p>補習アラカルト</p>	
<p>教育課程内外の位置付け</p>		<p>児童・生徒の参加イメージ</p> <p>全校生徒参加</p> <p>対象学年 小（高学年） 中・高（全学年）</p> <p>年間回数 20回程度(月2回)</p>
<p>内 容</p>	<p>児童・生徒の学習実態や希望に応じてきめ細かな講座のメニューを用意し、児童・生徒が自らの興味・関心や習熟の度合いに応じて講座を選択し、補習を受ける。教科の補習、作業的な学習、自習等を柔軟に実施するとともに、保護者を含む面談や中高双方向の進路イベント等を開催する。</p> <p>個別講座による補習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講座の難易度と到達目標、学習の内容を記したシラバスを作成（教員） ・シラバスの配布と各講座のオリエンテーション（教員） ・担任またはチューターと相談の上、講座を選択・登録・受講（児童・生徒） <p>クラス単位の補習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会、理科、その他作業を中心とした学習、自習時間 ・自習等と並行して個人面談や三者（生徒・保護者・教員）面談を実施 <p>複数の高校を招き、進路関係のイベントを実施（学期に1回程度）</p>	
<p>参加形態</p>	<p>教員（・地域） 生徒（・保護者）</p>	
<p>そ の 他</p>	<p>出勤する教員数を抑制するには、2時間連続補習などの設定が必要。発展講座はクラス人数を超えた編成とするなどにより、トータルとして講座の伸びを抑える。</p> <p>目的意識をもって臨ませるため、シラバスの事前配付と希望講座の登録などを工夫。</p>	

期待される効果	実施上の課題
<p>成績上位層を伸ばし、つまずきのある生徒をサポートする等、日常の授業ではできない学習指導に時間をかけることができる。面談の時間を確保することにより、より丁寧な進路指導等、生徒と向き合う時間を確保できる。</p> <p>アラカルト方式による希望講座の選択により、モチベーションの向上が期待できる。他校種の生徒、教職員と触れ合うことにより、進路意識の高揚を図ることができる。</p>	<p>時間割の調整が必要であり、大規模校では実施困難</p> <p>効果を得るためには月2回以上の実施が必要</p> <p>学習集団がふだんの授業と異なるので、教員が生徒を把握することが困難</p> <p>面談が多くなると担任の授業が不可能</p> <p>成績中位層の参加目的が曖昧</p>

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点
<p>平日の放課後に実施している補習やイベントを土曜日実施とすることで、平日の過密感の軽減が図られる。</p> <p>ボランティアを活用することで、対象教科（国語、数学、英語、社会、理科）の担当教員の負担を軽減する。</p>

C - 3

家庭の教育力のさらなる向上
 学校と地域が連携した取組の強化
 柔軟で弾力的な教育活動の展開

<p>名 称</p>	<p>土曜振り返り学習(どよスタ)</p>	
<p>教育課程内外の位置付け</p>		<p>児童・生徒の参加イメージ</p> <p>希望者による任意参加</p> <p>対象学年 小、中 全学年</p> <p>年間回数 3回～(各学期1回) (中はテスト前5回)</p>
<p>内 容</p>	<p>教員を目指す高校生や大学生、また、地域のボランティアが国語・社会・数学(算数)・理科・英語の補習を実施する。発展的内容については、大学院生等にも協力を依頼。</p> <p>「ふりスタ」の活用</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>中1振り返り集中学習「ふりスタ」とは...</p> <p>中学1年生の早期に基礎基本を徹底し、学習のつまずきの解消を図るとともに、主体的に学習に取り組む意欲・態目的度を身に付けさせるため、中学1年生を対象にした集中学習。小学校段階の基礎基本を徹底する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実施時期：中学1年の早い時期(4～8月) ・実施教科：国語・算数等 </div>	
<p>参加形態</p>	<p>地域・保護者(・教員) 児童・生徒</p>	
<p>そ の 他</p>	<p>1教科当たりの授業時間は20～40分等、柔軟に調整 参加率を上げるため、補習時間前に映画などを上映したり、部活動開始時間前に補習時間を計画する等の工夫</p>	

期待される効果	実施上の課題
<p>学習のつまずきを少しでも解消することが可能 放課後に実施していた補充学習を土曜日に移動することにより、平日の放課後を有効に活用することができる。 ボランティア、補助者等の人材確保が平日よりも確保しやすい。</p>	<p>北部地域ではボランティア、保護者等の人材確保が困難 振り返り学習の必要な生徒が参加するとは限らない。 自主参加であるため、参加率向上の工夫が必要</p>

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点
<p>教員を目指す高校生や大学生、地域のボランティアとの事前の打ち合わせを効果的に行う。 中1振り返り集中学習に取り組んでいる学校は、ノウハウを活かして教員の負担軽減を図る。</p>

<p>名 称</p>	<p>文化・スポーツ交流</p>	
<p>教育課程内外の位置付け</p>		<p>児童・生徒の参加イメージ</p> <p>全校児童・生徒参加(中・高は一部)</p> <p>対象学年 (幼) 小、中、高 全学年</p> <p>年間回数 年1～9回程度 (最大月1回)</p>
<p>内 容</p>	<p>1 部活動体験教室 中学生や高校生が地域の園児や小学生と、部活動指導や運動遊びを通して交流を図る。</p> <p>1 - 園児や小学生を中学校や高校に招待 1 - 中学生や高校生が幼稚園・小学校に出向き、出前教室を実施 1 - 種目ごとに小学校(幼稚園)または中学・高校のそれぞれの施設で実施</p> <p>2 地域合同クラブ 中学生や高校生が地域住民や地域クラブ等と合同で、練習や簡易ゲームを通じて交流する。</p> <p>3 発表会・公演会等 文化系部活動の練習成果(体育祭・文化祭での活動含む)を、地域の保育園や小学校、公民館等で発表。コンサート、茶会、演劇公演など。</p>	
<p>参加形態</p>	<p>生徒・教員 園児・児童・保護者・地域</p>	
<p>そ の 他</p>	<p>活動している部活動単位で参加し、活動時間は2～3時間程度</p>	

<p>期待される効果</p>	<p>実施上の課題</p>
<p>地域住民との交流により、新たな人間関係やコミュニケーションづくりの機会となる園児、児童、生徒間の異世代交流により、子どもたち同士の連帯感の醸成に寄与 地域の体育・文化活動の活性化に寄与</p>	<p>施設等の問題から大規模校での実施困難 園児、小学生、地域住民に対する安全配慮 中・高の部活動に参加していない生徒への対応 安全面に配慮したスペース確保 中学1年生の参加は園児、児童への指導役としては困難 指導者間の意思疎通</p>

<p>教員の勤務負担軽減の工夫と留意点</p>
<p>部活動指導であれば、教員全体としての負担は少ない。 小学生を引率する教員は、その小学生の在籍校が授業見学を学校行事として位置づけることで、週休日の振替等が可能となる。</p>

C - 5

家庭の教育力のさらなる向上
学校と地域が連携した取組の強化

<p>名 称</p>	<p>中学校「絆」祭り</p>		
<p>教育課程内外の位置付け</p>		<p>児童・生徒の参加イメージ</p> <p>希望者による任意参加</p>	
		<p>対象学年</p>	<p>小、中 全学年</p>
		<p>年間回数</p>	<p>1回</p>
<p>内 容</p>	<p>中学校区内の小中学校のPTAや町内会などが連携し、模擬店等さまざまな催しを中学校を会場として開催</p> <p>ステージ発表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒が部活動や文化祭等で取り組んだ内容の発表 ・PTAや地域の団体等によるコーラス等の発表 <p>PTAや町内会による模擬店、リサイクルバザー、制服交換会（中学校）等 地域のボランティア団体等によるブース 地域の文化的活動を実施している団体（PTA含む）の発表会等 各小中学校のブースを設け、各学校概要・取組紹介</p>		
<p>参加形態</p>	<p>保護者、地域、児童・生徒、教員</p>		
<p>そ の 他</p>	<p>教員は運営スタッフとしては最小限の関与 地域の回覧板等を通じ、幅広く広報 地元企業や高校、大学なども参加を呼びかけ</p>		

期待される効果	実施上の課題
<p>異世代交流が促進される 小中連携の強化を図ることができる 学校と地域社会の連携強化を図ることができる</p>	<p>財源や運営スタッフの確保 児童・生徒の参加率をあげる方策の検討 発表等のない児童・生徒への対応</p>

教員の勤務負担軽減の工夫と留意点
<p>学校教育活動ではないため、教員の公務としては位置づけられない。</p>

平成24年度「土曜日を活用した教育の在り方実践研究事業(仮称)」実施要項 (案)

1 趣旨

京都府内の公立小・中学校において、土曜日を活用したより多様で魅力的な教育活動を展開するために、完全実施から10年を迎えた学校週5日制における児童・生徒の土曜日の生活実態や地域の実情、保護者の意識を踏まえ、新学習指導要領の全面実施や地域とのより積極的な連携推進など、新たな教育環境の変化に対応した、土曜日を活用した効果的な教育活動の実施に向け、実践的・専門的な研究を行う。

2 指定期間

平成24年4月1日から平成25年3月31日まで(1年間)

3 指定の手続き

- (1) 本事業の実施を希望する市町(組合)教育委員会は、別紙様式により、事業計画書を京都府教育委員会教育長(以下「教育長」という。)に提出すること。
- (2) 教育長は、事業計画書を審査するとともに、必要に応じて事情を聴取の上、土曜教育実践研究指定校として指定する。
- (3) 市町(組合)教育委員会は、研究の実績を別途指定する様式で教育長あて報告すること。

4 事業の実施方法

- (1) 土曜教育実践研究指定校は、地域や学校等の実態や環境に応じて「家庭の教育力のさらなる向上」、「学校と地域が連携した取組の強化」、「柔軟で弾力的な教育活動の展開」につながる土曜日における学校教育活動を計画し、別添モデル例を参考にしながら実践研究を行う。
- (2) 実施する学校教育活動は、次のいずれかによるものとする。
教育課程に位置づける授業
課外活動
- (3) 教育課程に位置づける授業として実施する場合において、次のいずれにも該当する場合は、児童及び生徒の休業日の振替を行わない。
土曜日の午前中であること。
各月2回を上限とすること。
公開であること。
校内の指導体制を確立するとともに、保護者及び地域住民等に対して趣旨説明を行うなど、十分な理解を得ていること。
社会教育関係団体、社会体育関係団体等との調整が十分に図られていること。
上記 から のほか、教育効果等総合的に判断し必要と認められる場合
- (4) 土曜教育実践研究指定校は、府教育委員会が設置する「土曜日を活用した教育の在り方連絡協議会(仮称)」において、必要に応じて研究経過及び成果の報告等を行う。
- (5) 土曜教育実践研究指定校は、府教育委員会及び市町教育委員会の指導助言のもとに実践研究を行う。
- (6) 実施にあたっては、条例等に基づき、週休日の振替等を行うとともに、教職員の理解と協力を求め、学校行事の精選など勤務負担軽減に努めなければならない。

5 その他

この要項の実施について必要な事項については、別に定める。

教員の勤務環境の改善に向けた法制度等の検討

教員の土曜勤務に係る課題と対応方策

課 題	対 応 方 策	
週休日の振替先確保 (総労働時間の縮減にも留意)	長期休業期間中に振替先を確保	夏季休業期間の検討 校内研修、市町村研修、郡研修、府研修の精選 学校閉鎖期間の延長 3者面談等を長期休業期間中以外に実施 半日単位の取得も考慮
	課業期間に振替先を確保	平日の午後の授業を土曜日に移行し、振替可能日とする (同一週内の振替が可能)
平日の過密感の軽減	平日の半日を空き時間	▶ または、会議や教材研究の時間とする(過密感の軽減) 別添『平日の過密感の軽減を考慮した週時程・勤務の例』参照
4h勤務を考慮した時程の工夫	授業時間・授業時数の短縮等により、12時30分に退勤が可能となる時程とする	
非常勤講師の勤務条件等の整備	年度当初に出勤が必要な土曜日を明示し、平日の勤務時間を減らして週当たりの任用時間数を調整	
ライフスタイルへの影響	育児や介護が必要な職員の勤務について配慮が必要	
そ の 他	既存の事業や取組を活かし、新規に企画する場合は既存事業の見直し等を検討 事業の形態に応じて、地域の人材をコーディネーター等として活用的措置の検討 教員の勤務環境の改善について継続して検討	

土曜日教育実施に当たっての私学と公立における法制度上の相違点

学校教育法施行規則第61条において、公立小学校における休業日は、日曜日及び土曜日とされ、「特別の必要がある場合は、この限りでない」と定められている。

【対応策】

- ・学校週5日制の趣旨を踏まえ、地域に開かれた学校づくりを進める観点から実施
- ・教育課程に位置付けられた授業は、法律を逸脱しない範囲として月2回程度を上限(文科省見解)
 労働基準法第32条の4において、労働時間1週40時間の例外として1年単位の変形労働時間制が認められているが、地方公務員については、地方公務員法第58条第3項に適用除外の規定があり、公立学校教育職員については、給与特別措置法に地公法の読替規定があり同様に適用除外となる。

【対応策】

- ・給与条例第33条による週休日の振替又は勤務時間の割振変更を行う。(前4週間、後16週間)

振替の対象となる業務

府教育長通知により定めたもの
 (超勤4項目) 実習に関する業務 修学旅行その他学校行事 職員会議 非常災害の場合
 (その他) 学習活動 学校説明会 入学者選抜 地域行事への引率 P T Aの会議
 対外運動競技等への引率 高大連携行事への引率

平日の過密感の軽減を考慮した週時程・勤務の例

例＜ 1 ＞

週時程	平日の授業を土曜日に移動し、平日に2回の午後に放課とする。
勤務	勤務が割り振られない午後の半日と教材研究等に活用できる午後の半日。

活用できる主なモデル例

もうひとつの小さな研修旅行、公開授業、保護者参加型授業、研究発表会、
スクール・ライフ・ガイダンス、子ども見守りウィーク(通学路安全確認DAY)、防災マップづくり 等

例＜ 2 ＞

週時程	平日の授業を土曜日に移動し、平日に1回の午後に放課とする。
勤務	勤務が割り振られない午後の半日又は教材研究等に活用できる午後の半日。

活用できる主なモデル例

もうひとつの小さな研修旅行、公開授業、保護者参加型授業、研究発表会、秋のフェスティバル、
スクール・ライフ・ガイダンス、子ども見守りウィーク(通学路安全確認DAY)、
チャレンジ！体力測定、防災マップづくり、補習アラカルト、土曜振り返り学習(どよスタ) 等

例＜ 3 ＞

週時程	平日の6限目の授業を土曜日に移動し、6限の授業を減らす。
勤務	平日の放課後の時間を確保し教材研究や子どもの面談等に活用。

活用できる主なモデル例

公開授業、保護者参加型授業、研究発表会、秋のフェスティバル
子ども見守りウィーク(通学路安全確認DAY)、チャレンジ！体力測定、学校招待会、防災マップづくり 等

平日の過密感の軽減を考慮した週時程・勤務の例 < 1 >

週時程

- ・ 1週目の「A週」、2週目の「B週」に分け、A・Bの2パターンの週時程を組み合わせることで2週間1セットを回す(特定の1週のみでも可)。
- ・ A週の「火曜日5限(11)」「木曜日5・6限(22・23)」をB週の「土曜日1～3限(11・22・23)」に移動させる。
- ・ 週当たりの授業時数は29時間のままB週の火・木曜日の午後を放課とする。

A週							B週						
	月	火	水	木	金	土		月	火	水	木	金	土
1	1	7	12	18	24		1	1	7	12	18	24	11
2	2	8	13	19	25		2	2	8	13	19	25	22
3	3	9	14	20	26		3	3	9	14	20	26	23
4	4	10	15	21	27		4	4	10	15	21	27	
5	5	11	16	22	28		5	5		16		28	
6	6		17	23	29		6	6		17		29	

勤務

同一週内で勤務時間の割り振り変更が可能

土曜日の4時間の勤務時間の割り振りを、同一週内の火曜日か木曜日の午後4時間の勤務の割り振りをやめる日として設定できる。(土曜の午前出勤 火又は木曜の午後勤務なし)

半日の放課時間の活用が可能

火曜日又は木曜日の午後の時間で教材研究の時間に充てることができる。

火曜日又は木曜日の午後の時間に会議時間を設定し、他の曜日にあった6限終了後の会議を少なくし過密感をなくす。

夏季休業期間中に実施されている研修を火曜日又は木曜日の午後の時間に開催することで、夏季休業期間の連続した夏季特休・年次休暇取得等を促進させる。

休暇取得の促進が可能

火曜日又は木曜日の午後が勤務となった場合でも、教材研究、会議、研修等が終わり次第、時間年休の取得ができる。

課題

- ・ 火曜日又は木曜日の午後に勤務時間を割り振らない場合は、会議や出張を入れにくい。
- ・ 火曜日又は木曜日の午前授業と給食時間が終わった後の放課は1時頃からとなるため、教員によっては、午後の時間に余裕がない。
- ・ 土曜日の登下校、火曜日・木曜日の下校指導等、安全面での配慮が必要となる。
- ・ 火曜日・木曜日の放課後、児童・生徒の過ごし方に工夫が必要か。

平日の過密感の軽減を考慮した週時程・勤務の例 < 2 >

週時程

- ・ 1週目の「A週」、2週目の「B週」に分け、A・Bの2パターンの週時程を組み合わせることで2週間1セットを回す(特定の1週のみでも可)。
- ・ A週の「水曜日5限・6限(16・17)」をB週の「土曜日1限・2限(16・17)」に移動させる。
- ・ 週当たりの授業時数は29時間のままB週の水曜日の午後を放課とする。
- ・ 土曜日の午前中から地域の体験活動等への参加が可能。

A週							B週						
	月	火	水	木	金	土		月	火	水	木	金	土
1	1	7	12	18	24		1	1	7	12	18	24	16
2	2	8	13	19	25		2	2	8	13	19	25	17
3	3	9	14	20	26		3	3	9	14	20	26	
4	4	10	15	21	27		4	4	10	15	21	27	
5	5	11	16	22	28		5	5	11		22	28	
6	6		17	23	29		6	6			23	29	

勤務

同一週内で勤務時間の割り振り変更が可能

土曜日の4時間の勤務時間の割り振りを、同一週内の水曜日の午後4時間の勤務の割り振りをやめる日として設定できる。(土曜の午前出勤 水曜の午後勤務なし)

半日の放課時間又は午前の2時間程度の活用が可能

水曜日の午後の時間又は土曜日の放課後で教材研究の時間に充てることができる。

水曜日の午後の時間に会議時間を設定し、他の曜日にあった6限終了後の会議を少なくし過密感をなくす。

夏季休業期間中に実施されている研修を水曜日の午後の時間に開催することで、夏季休業期間の連続した夏季特休・年次休暇取得等を促進させる。

休暇取得の促進が可能

水曜日の午後が勤務となった場合でも、教材研究、会議、研修等が終わり次第、時間年休の取得ができる。

土曜日の放課も、特に勤務等がなければ年次休暇の取得ができる。

課題

- ・ 水曜日の午後に勤務時間を割り振らない場合は、会議や出張を入れにくい。
- ・ 水曜日の午前授業と給食時間が終わった後の放課は1時頃からとなるため、教員によっては、午後の時間に余裕がない。
- ・ 土曜日の登下校、水曜日の下校指導等、安全面での配慮が必要となる。
- ・ 水曜日の放課後、児童・生徒の過ごし方に工夫が必要か。

平日の過密感の軽減を考慮した週時程・勤務の例 < 3 >

週時程

- ・ 1週目の「A週」、2週目の「B週」に分け、A・Bの2パターンの週時程を組み合わせることで2週間1セットを回す(特定の1週のみでも可)。
- ・ A週の「月曜日6限(6)」「水曜日6限(17)」「木曜日6限(23)」をB週の「土曜日1~3限(6・17・23)」に移動させる。
- ・ 週当たりの授業時数は29時間のままとする。

A週							B週						
	月	火	水	木	金	土		月	火	水	木	金	土
1	1	7	12	18	24		1	1	7	12	18	24	6
2	2	8	13	19	25		2	2	8	13	19	25	17
3	3	9	14	20	26		3	3	9	14	20	26	23
4	4	10	15	21	27		4	4	10	15	21	27	
5	5	11	16	22	28		5	5	11	16	22	28	
6	6		17	23	29		6					29	

勤務

平日の放課時間の活用が可能

月～木曜日の5限終了後の時間を教材研究や会議、研修等で活用できる。

5限終了後の時間を活用し、必要に応じて子どもの面談や指導の時間等が、ゆとりをもって設定できる。

休暇取得の促進が可能

平日の4日間で、時間年休の取得の可能性が増える。

平日の保護者や地域との調整時間が可能

土曜日に行う保護者や地域と連携した体験活動等の打ち合わせが、放課後の時間帯に設定できる。

課題

- ・ 同一週内の勤務時間の割り振り変更ができない。
- ・ 平日を5限終了とするよりも、6限目を適宜活用することで、平日授業のゆとりが図れるか。
- ・ 月～木曜日の放課後、児童・生徒の過ごし方に工夫が必要か。